

2020・5・29 【角川俳句賞2020 プランB】 選51句

→last

暖かくなればと思ふことばかり 古茶といふ音の響きも良からずや

寧楽と書けば唐天竺や春霞 どの顔もプール疲れの授業なり

春雪のいま本降りの暗みかな ゆるゆると起きてシャワーや昼餉前

耕して~~鉄~~ねつとりとしてきたる 蟬の穴しづか蟻の穴にぎやか

呪文の如くチヨコレイトや春休~~の社~~ 割箸の先に毛虫の巻き付きぬ

泣き泣きて色の褪せたる涅槃絵図 明るさの明日を信じて火取虫

仏生会桜餅など良からずや 柿の蒂黒く残りし若葉かな

ざくざくと浅蜷が浜と申さばや 切株を囲む走り根露けしや

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙 切り出して柱のごとし新豆腐

川沿ひに子猫の出づるバルコニー 一つづつ打って百千鉦叩

梅匂ふ医者者の卵の徹夜明け 金賞の菊の余生と日向ぼこ

ひらひらと花びらは春越えられず 引かれ行く牛の貫禄秋桜

吾輩は西日に立てるポストなり~~の社~~ 皺寄せて熟柿の皮のひとつとこ

ころころと泉の底で転げをる 山一つ氷つてゐたる昼の酒

電柱や出水の町に灯を点す 膝~~に~~来る冬の日差や猫が邪魔

埒もなく旅の疲れの籐寝椅子 火事跡の黒き柱や雪女郎

ポンと抜くビール家ではプシユと開け 店先に氷らむと夜の水たまり

17行3段組12ポ 2020年5月29日 18:20へ1桐9
涙をみた
悲しさや風邪の母から引き離され

幼子も噓の時は立て続け

おしやべりの子に耳貸して毛糸編み

結局は初案に戻る炬燵かな

眠さうで眩しさうなる日向ぼこ

いだかれてラグビーボール汗みどろ

何食つて声の大きな寒鴉

みづからをなきものにする落葉焚

水仙にエアコンの風あてぬやう

元旦に一句を得たる目出度さよ~~初日の五句を待たると持た~~

去年今年物音もなき真の闇~~元日~~

正月の猫の欠伸も目出度けれ

行く年のその足音を聞かんとす

双六の波乱万丈忘れめや

耳糞の出たがつてゐる寝正月

初髪の銀髪いよよ尊けれ~~全髪をいよよ尊けれ~~

白紙へと戻る術なき古日記~~全の如くは老社母~~

2020・5・29 【角川俳句賞2020プランB】 選50句

17行3段組12ポ 2020年5月29日 23:23 へ1 桐9

寧楽と書けば唐天竺や春霞

ポンと抜くビール家ではプシユと開け

幼子も小さき嚏を立て続け

梅匂ふ医者目付の卵の徹夜明け

蟬の穴しづか蟻の穴にぎやか

無残やな風邪の母から引き離され

春雪のいま本降り目付の暗みかな

割箸の先に毛虫が絡みつき

白紙へと戻る術なき古日記

耕して目付鋤ねつとりと黒々と

吾輩は西日に立てる赤い箱

行く年のその足音を聞かんとす

泣き泣きて色の褪せたる涅槃絵図

明るさの明日を信じて火取虫

元日の猫の欠伸も目出度けれ

仏生会桜餅など良からずや

切株を囲む走り根露けしや

初髪目付の金の娘に銀の祖母

ざくざくと浅蜷が浜と申さばや

呪文の如くチョコレイトや露地の秋

歌留多取る水仕で冷えし手が強し

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

引かれ行く牛の貫禄秋桜

双六の波乱万丈忘れめや

川浴目付心に子猫の出づるバルコニー

鴉鳴くや泣き出しさうな空の色

耳糞の出たががつてゐる寝正月

ひらひらと花びらは春越えられず

切り出して柱のごとし新豆腐

いだかれてラグビーボール汗みどろ

柿の蒂目付黒く残りし柿若葉

綴寄せて熟柿の皮のひとつとこ

結局は初案に戻る炬燵かな

古茶といふ音の響きも良からずや

金賞の菊の余生と日向ぼこ

何食つて声の大きな寒鴉

電柱や出水の町に灯を点す

少しづつ進む夜業の時計なり

水仙にエアコンの風あてぬやう

ゆるゆると起きてシャワーや昼餉前

山一つ氷つてゐたる昼の酒

店先に氷らむと夜の水たまり

どの顔もプール疲れの授業なり

膝に来る冬の日差や猫が邪魔

火事跡の黒き柱や雪女郎

埒もなく旅の疲れの籐寝椅子

おしやべりの子に耳貸して毛糸編み

暖かくなればと思ふことばかり

白玉の熱きを冷ます氷水

みづからをなきものにする落葉焚

2020・5・30 【角川俳句賞2020プランB】 選50句

寧楽と書けば唐天竺や春霞

埒もなく旅の疲れの籐寝椅子

幼子も小さき嚏を立て続け

梅匂ふ医者の卵の徹夜明け

白玉の熱きを冷ます氷水

無残やな風邪の母から引き離され

春雪のいま本降りの暗みかな

ポンと抜くビール家ではプシュと開け

白紙へと戻る術なき古日記

耕して鉄ねつとりと黒々と

蟬の穴しづか蟻の穴にぎやか

行く年のその足音を聞かんとす

ビル裏に配管の巢や燕来る

割箸の先に毛虫がくねくねと

遠浅の沖に来てる宝船

泣き果てて褪せたる色の涅槃絵図

吾輩は西日に立てる赤い箱

初富士の一句を得たる目出度さよ

仏生会桜餅など良からずや

明るさの明日を信じて火取虫

初髪の金の娘に銀の祖母

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

切株を囲む走り根露けしや

歌留多取る水仕で冷えし手が強し

ざくざくと浅蜷が浜と申さばや

呪文の如くチヨコレイトや露地の秋

耳糞の零れんとする寝正月

川沿ひに子猫の出づるバルコニー

引かれ行く牛の貫禄秋桜

いだかれてラグビーボール汗みどろ

生家跡には一面の春の草

鳴鳴くや泣き出しさうな空の色

結局は初案に戻る炬燵かな

ひらひらと花びらは春越えられず

切り出して柱のごとき新豆腐

何食つて声の大きな寒鴉

柿若葉とところどころに蒔の黒

金賞の菊の余生と日向ぼこ

水仙にエアコンの風あてぬやう

古茶といふ音の響きも古茶らしく

山一つ氷つてゐたる昼の酒

店先に氷らむと夜の水たまり

電柱が出水の町に灯を点す

膝に来る冬の日差や猫が邪魔

火事跡の黒き柱や雪女郎

ゆるゆると起きてシャワーを昼餉前

おしやべりの子に耳貸して毛糸編み

暖かくなればと思ふことばかり

どの顔もプール疲れの授業なり

みづからをなきものにする焚火かな

～子猫の光や?～

土手行けば 子猫の光や? 1000 = 13 + 12 + 6 + 12 + 7

建誌了

2020.5.30 【角川俳句賞2020 プランB】 選50句

寧楽と書けば唐天竺や春霞

白玉の熱きを冷ます氷水

みづからをなきものにす焚火かな

梅匂ふ医者の卵の徹夜明け

ポンと抜くビール家ではプシュと開け

幼子も小さき嚏を立て続け

本降りに暗みたりけり春の雪

万緑の中の危ない橋わたる

無残やな風邪の母から引き離され

耕して鋤ねつとりと黒々と

蟬の穴しづか蟻の穴にぎやか

白紙へと戻る術なき古日記

ビル裏に配管の巢や燕来る

割箸の先に毛虫がくねくねと

行く年のその足音を聞かんとす

泣き果てて褪せたる色の涅槃絵図

吾輩は西日に立てる赤い箱

御降の後の日和の定まりぬ

仏生会桜餅など良からずや

明るさの明日を信じて火取虫

遠浅の沖に来てゐる宝船

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

切株を囲む走り根露けしや

歌留多取る水仕で冷えし手が強し

ざくざくと浅蜷が浜と申さばや

呪文の如くチヨコレイトや露地の秋

耳くその零れんとする寝正月

土手ゆけば子猫の見ゆるバルコニー

引かれ行く牛の貫禄秋桜

いだかれてラグビーボール汗みどろ

生家跡には一面の春の草

鳴鳴くや泣き出しさうな空の色

結局は初案に戻る炬燵かな

ひらひらと花びらは春越えられず

切り出して柱のごとき新豆腐

何食つて声の大きな寒鴉

柿若葉とところどころに葎の黒

金賞の菊の余生と日向ぼこ

水仙にエアコンの風あてぬやう

古茶といふ音の響きも古茶らしく

流星や奇跡はある日突然に

店先に氷らむと夜の水たまり

電柱が出水の町に灯を点す

山一つ氷つてゐたる昼の酒

火事跡の黒き柱や雪女郎

ゆるゆると起きてシャワーを昼餉前

膝に来る冬の日差や猫も来て

暖かくなればと思ふことばかり

埒もなく旅の疲れの籐寝椅子

おしやべりの子に耳貸して毛糸編み

泣き果てて褪せたる色の涅槃絵図

行く年のその足音を聞かんとす

ささたし

了る寝正月

2020・5・31 【角川俳句賞2020 プランB】 選49句

かあ子

17行3段組12ポ 2020年5月31日 11:55 へ1 桐9

寧楽と書けば唐天竺や春霞
 本降りに暗みたりけり春の雪
 耕して鉄ねつとりと黒々と^{金たれ}
 ビル裏に配管の巢や燕来る
 泣く程に色^{ままた}の褪せゆく涅槃絵図
 仏生会桜餅など良からずや
 目の玉は二つのままに蝌蚪蛙
 ざくざくと浅蜷が浜と申さばや
 土手ゆけば子猫の見ゆるバルコニー
 生家跡には一面の春の草
 ほのかなる匂ひの花の首飾り
 古茶といふ音の響きも古茶らしく
 電柱が出水の町に灯を点す
 ゆるゆると起きてシャワーを昼餉前
 埒もなく旅の疲れの籐寝椅子
 白玉の熱きを冷ます氷水
 ポンと抜くビール家ではプッシュと開け

万緑の中の危ない橋わたる
 秋冬の愁ひはなけれ蟬の声
 割箸の先に毛虫がくねくねと
 吾輩は西日に立てる赤い箱
 明るさの明日を信じて火取虫
 遠花火虫けらどもは闇の中
 切株を囲む走り根露けしや
 呪文の如くチヨコレイトや露地の秋
 引かれ行く牛の貫禄秋桜
 鳴鳴くや泣き出しさうな空の色
 切り出して柱のごとき新豆腐
 金賞の菊の余生と日向ぼこ
 流星や奇跡は^{秋のまき}ある日突然に
 山の名の酒川の名^{秋のまき}の酒秋深し
 行く秋の海に広がる河の果て
 山一つ氷つてゐたる昼の酒
 膝に来る冬の日差や猫も来て

おしやべりの子に耳貸して糸編み
 みづからをなきものにする焚火かな
 幼子も小さき嚏を立て続け
 無残やな風邪の母から引き離され
 白紙へと戻る術なき古日記
 行く年のその足音を聞かんとす
 歌留多取る水仕で冷えし手が早し
 結局は初案に戻る炬燵かな
 何食つて声の大きな寒鴉
 水仙にエアコンの風あてぬやう
 店先に氷らむと夜の水たまり
 木のあはれ草のあはれを雪に消す
 火事跡の黒き柱や雪女郎
 梅匂ふ医者^{かあ子}の卵の徹夜明け
 暖かくなればと思ふことばかり

2020.5.31 【角川俳句賞2020 プランB】 選50句

寧楽と書けば唐天竺や春霞

万緑の中に危ない橋かかる

山一つ氷つてゐたる昼の酒

本降りに暗みたりけり春の雪

秋冬の愁ひはなけれ蟬の声

膝に来る冬の日差や猫も来て

耕して鉄ねつとりと重たけれ

割箸の先に毛虫がくねくねと

おしやべりの子に耳貸して毛糸編み

ビル裏に配管の巢や燕来る

吾輩は西日に立てる赤い箱

みづからをなきものにする焚火かな

泣く程に褪せゆくままに涅槃絵図

明るさの明日を信じて火取虫

無残やな風邪の母から引き離され

仏生会桜餅など良からずや

遠花火虫けらどもは闇の中

白紙へと戻る術なき古日記

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

切株を囲む走り根露けしや

行く年のその足音を聞かんとす

ざくざくと浅蜷が浜と申さばや

呪文の如くチョコレイトや露地の秋

友らみな老いて目出度き年賀状

土手ゆけば子猫の見ゆるバルコニー

引かれ行く牛の貫禄秋桜

歌留多取る水仕で冷えし手が早し

生家跡には一面の春の草

鴉鳴くや泣き出しさうな空の色

結局は初案に戻る炬燵かな

ほのかなる匂ひの花の首飾り

蛙をゆく白き軽トラ雁渡る

何食つて声の大きな寒鴉

古茶といふ音の響きも古茶らしく

団栗を転がしてみる机かな

水仙にエアコンの風あてぬやう

電柱が出水の町に灯を点す

金賞の菊の余生と日向ぼこ

木のあはれ草のあはれを雪に消す

ゆるゆると起きてシャワーを昼餉前

秋の灯の赤き点滅塔高し

火事跡の黒き柱や雪女郎

埒もなく旅の疲れの籐寝椅子

流星や奇跡はある日突然に

梅匂ふ医者者の卵の徹夜明け

白玉の熱きを冷ます氷水

真つ暗な紅葉の宿や月もなし

暖かくなればと思ふことばかり

ポンと抜くビール家ではプッシュと開け

行く秋や海に広がる河の果て

2020・5・31 【角川俳句賞2020 プランB ある日突然】

選50句 3段組12ポ 2020年5月31日 14:14 へ1 桐9

寧楽と書けば唐天竺や春霞

秋冬の愁ひはなけれ蟬の声

膝に来る冬の日差や猫も来て

本降りに暗みたりけり春の雪

割箸の先に毛虫がくねくねと

おしやべりの子に耳貸して毛糸編み

耕して鍬ねつとりと重たけれ

埒もなく旅の疲れの籐寝椅子

山一つ氷つてゐたる昼の酒

ビル裏に配管の巢や燕来る

吾輩は西日に立てる赤い箱

みづからをなきものにする焚火かな

泣く程に褪せゆくままに涅槃絵図

明るさの明日を信じて火取虫

無残やな風邪の母から引き離され

仏生会桜餅など良からずや

遠花火虫けらどもは闇の中

白紙へと戻る術なき古日記

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

切株を囲む走り根露けしや

行く年のその足音を聞かんとす

ざくざくと浅蜷が浜と申さばや

呪文の如くチヨコレイトや露地の秋

友らみな老いて目出度き年賀状

土手ゆけば子猫の見ゆるバルコニー

引かれ行く牛の貫禄秋桜

歌留多取る水仕で冷えし手が早し

生家跡には一面の春の草

鴉鳴くや泣き出しさうな空の色

結局は初案に戻る炬燵かな

ほのかなる匂ひの花の首飾り

畦をゆく白き軽トラ雁渡る

何食つて声の大きな寒鴉

古茶といふ音の響きも古茶らしく

秋の灯の赤き点滅塔高し

卓の水仙縁側の福寿草

電柱が出水の町に灯を点す

団栗を転がしてみる机かな

木のあはれ草のあはれを雪に消す

白玉の熱きを冷ます氷水

流星や奇跡はある日突然に

火事跡の黒き柱や雪女郎

ポンと抜くビール家ではプッシュと開け

真つ暗な紅葉の宿や月もなし

梅匂ふ医者者の卵の徹夜明け

ゆるゆると起きてシャワーを昼餉前

行く秋や海に広がる河の果て

暖かくなればと思ふことばかり

万緑の中に危ない橋かかる

金賞の菊の余生と日向ぼこ

昔の余生

泣く程に褪せゆくままに涅槃絵図

秋の灯の赤き点滅塔高し

真つ暗な紅葉の宿や月もなし

2020・5・31 【角川俳句賞2020 プランB 菊の余生】 選50句

17行3段組12ポ 2020年5月31日 15:29 へ1 桐9

寧楽と書けば唐天竺や春霞 秋冬の愁ひはなけれ蟬の声 膝に来る冬の日差や猫も来て
本降りに暗みたりけり春の雪 割箸の先に毛虫がくねくねと おしやべりの子に耳貸して毛糸編み
耕して鍬ねつとりと重たけれ 埒もなく旅の疲れの籐寝椅子 山一つ氷つてゐたる昼の酒
ピル裏に配管の巢や燕来る 吾輩は西日に立てる赤い箱 みづからをなきものにする焚火かな
涅槃絵図涙ながらに褪せゆくも 明るさの明日を信じて火取虫 無残やな風邪の母から引き離され
仏生会桜餅など良からずや 遠花火虫けらどもは闇の中 白紙へと戻る術なき古日記
目の玉は二つのままに蝌蚪蛙 切株を囲む走り根露けしや 行く年のその足音を聞かんとす
ざくざくと浅蜷が浜と申さばや 呪文の如くチヨコレイトや露地の秋 友らみな老いて目出度し年賀状
土手ゆけば子猫の見ゆるバルコニー 引かれ行く牛の貫禄秋桜 歌留多取る水仕で冷えし手が早し
生家跡には一面の春の草 鴉鳴くや泣き出しさうな空の色 卓の水仙縁側の福寿草
ほのかなる匂ひの花の首飾り 蛙をゆく白き軽トラ雁渡る 結局は初案に戻る炬燵かな
古茶といふ音の響きも古茶らしく 秋の灯の赤き点滅塔高し 何食つて声の大きな寒鴉
電柱が出水の町に灯を点す 団栗を転がしてみる机かな 木のあはれ草のあはれを雪に消す
白玉の熱きを冷ます氷水 流星や奇跡はある日突然に 火事跡の黒き柱や雪女郎
ポンと抜くビール家ではプッシュと開け 真つ暗な紅葉の宿に月もなし 梅匂ふ医者者の卵の徹夜明け
ゆるゆると起きてシャワーを昼餉前 行く秋や海に広がる河の果て 暖かくなればと思ふことばかり
万緑の中に危ない橋かかる 金賞の菊の余生と日向ぼこ